花より団子

正宗白鳥

青空文庫

洗足池畔の私の家の向ひは、東京近郊の桜の名所である。私は、終戦の前年軽井沢に疎開して以来十数年間、毎月一度は必ず上京してゐたが、盛りの短い桜時には、一度も来合せたことはなかつた。この頃、こゝに居を定めることになつたので、久振りに花の盛りを朝夕たつぷり見ることが出来た。急速に温くなつたので、見る〳〵咲揃ふやうになつた。「細雪」のなかの或女性は、花のなかでは何が好きかと訊かれて、「それは桜やわ」と答へた。たべ物としての魚類のうちでは何が好きかと訊かれて、それは鯛であると答へた。日本人としての平均した好みはさういふところなのだらう。瀬戸内海沿岸に生れた私は、幼い時分、最もうまい魚は、鯛の浜焼であると教へられてゐた。捕り立ての鯛を、浜辺の塩がまで蒸し焼きにしたのが、人類最上の美食であるやうに、傍からの入知恵で思はせられてゐた。花は桜であると、子供心に思込まされてゐた。今の私は、三分咲きから五分咲き、満開と、忙しく咲き続け、咲きほこつてゐる一団の桜花を、私の部屋の正面に見ながら、桜は花の王であり、鯛は魚の王であると、早くから教へられたことを思浮べてゐる。そして、これまで見た桜の名所を、次から次へと思出して、閑余の楽みにしようとしたが、歌人詩人などによつて伝統的に折り紙のついてゐる吉野こそ、今なほ日本一ではあるまい

かと推察された。私は吉野へは三度も遊んだのであるが、最初が最もよかつた。花も景色も同じ事なのだが、あの頃はまだ、花時にもひどい雑沓はなかつた。飲んだくれが醜態を演じる度合ひがまだ猛烈でなかつた。世が末になるにつれ、二度目三度目と見に行つた時には、いつそ、花の散つたあとの吉野がいゝのぢやないかと思はれたりした。

和歌にも俳句にも、物語にも絵画にも音曲にも、古代から今日まで、桜は讃美の限りを尽されてゐる。新たな讃美の言葉なんか残されてゐさうでない。鯛は魚の王、桜は花の王、獅子は百獣の王、人間は万物の霊長。

「神は天地の主宰にして人は万物の霊長なり」と、私が幼年時代に学んだ最初の読本には書かれてゐた。こんな六ケしい文章が、意味の説明はされないで、棒読みに読まされ、諳記さゝれてゐたのだが、これはアメリカの小学読本（ウイルソンリーダー）の直訳であつたのださうだ。同時の修身読本には、「酒と煙草は養生に害あり」と云つたやうな訓戒が記されてゐて、六歳七歳の頃の私達は、それを最初の人生教訓のやうに教へられたのであつた。

こんな小学読本修身読本を学校で学ぶ外に、私などは、封建時代の寺子屋の名残りを追はされて、孝経論語孟子などの素読をやらされたのであつたが、後から考へると、それ等

の素読の方が、多少は精神の糧になり、後日になつて何かの役に立つたやうなものだ。

ところで、その時分に、作文の稽古もはじめられてゐて、「天長節を祝す」とか、「春季皇霊祭日に山に登るの記」とかの課題で、文章らしいものを書かされるやうになつてゐた。私は課題に応じて筆を採つても、何も書くことはなかつた。

「日の丸の旗が村のどの家にも立てられた」とか、「天気清朗にして海も静かなり」とか、どうにか自分の頭を働かせて書くと、それで、何か珍らしいえらい事をしたやうな気がした。国旗の出されてゐる家は極めて少くてもさう書いたのだ。あの頃の作文はそれでよかつたのだ。一瓢を携へて山に登ると書いてもよかつたのだ。

一度、花見の記が課題となつた。山にも野にも桜は咲いてゐるので、それを見て何か書くつもりになつたが、知らず知らず熱心になつて見てゐると、桜はどうしてこんなに綺麗なのだらうと、不思議に思はれだした。私の家の離れの庭には一本の八重桜があつて、ほかの一重桜におくれてその花の咲く時には、祖母が先に立つて弁当を作つて、孫達と花見の宴を催すことがあつた。私はそれを作文の種にして花見の記を作らうとした。それで離れの庭のまだ咲かない八重桜を見上げながら、花見の記を書かうとしたが、書かうとすると頭がごちや〳〵して何も書けさうでなかつた。よく咲いた花の下で、お婆あさんや、私

の兄弟が揃つて、玉子焼や蒲鉾や煮しめのお弁当を食べたことを、今年はまだ食べもしないのに、食べたつもりで書かうとしたが、食べもせぬのに食べたつもりで書くのが詰らなくなつた。「桜の花はどうしてあんなに綺麗なのだらう」と、今年はじめて不思議な思ひをしたことを書かうかとふと思つたが、そんな事を書いちや悪いやうな気がした。それで、為方なしに、何も書かないで、白紙のまま先生の前に出すと、

「どうしたのぢや。何も書いてないと零点だぜ」

「しやうがありません」

「何か書きなさい。今は桜の盛りぢや。花は桜木、人は武士と云ふことを君も聞いとるだらう」

「知りません」

「咲いた桜になぜ駒つなぐ、駒がいさめば花が散ると云ふ唄聞いたことないか」

「聞きません」

「それでは花より団子。君も団子の方が好きなんだらう。花見に行つて団子をたべたと書いたらいいぢやないか」

先生にさう云はれると、私はその通りに書かうかと思つた。桜の花を楽むよりも団子で

も食べたいと思ひながら筆を執つてゐると、桜の花が団子のやうに見えだした。団子が串に差されて立つてゐるのが満開の桜の形か。私はさう思ひ出すと、それが面白くなつた。「花見の記」が団子の記になつた。団子が咲いた〳〵と書いた。先生はそれを取上げていゝ点をつけて呉れた。この先生も剽軽であつたのか。

でも、私にも団子は団子、桜は桜。団子は口にうまいもの、桜は目に美しいもの。或日、隣の家から貰つた団子を腹一杯食べた私は、離れの庭にぽつり〳〵と咲きだした花を、自分一人で見上げてゐたが、膨らんだ団子腹を消化させる気になつたのか、その桜の木にする〳〵と登つて、咲く花を一握り掴んで口の中へ入れた。うまいまづいの感じではなく、綺麗なものを、口から喉を通して腹に入れたやうな感じがした。さうして、二握り三握り、むしや〳〵と喰つたのであつた。それ以上は喰へさうでなかつたが、さうしたあとで木から飛下りて、花から花を見上げてゐると、「こんな綺麗な花の味を誰も知るまい」と、それを面白いことのやうに考へだした。いくら美しくつても、これは人間のたべ物ぢやないと思はれたので、誰にも云はなかつた。

だが、あくる日、午餐のあとで、その離れの庭に出ると、昨日にもまして花の色づいたのに心惹かれて、またその木に登つて、二握り三握りつかみ取つて、口から喉へ通した。

味がどうであらうと、綺麗なものを腹に入れたといふ気持は快くなつた。家の者に気づかれないうちにどれほどのものが喰はれるかと、人知れぬ異様なたのしみになつた。

青空文庫情報

底本：「日本の名随筆65　桜」作品社
1988（昭和63）年3月25日第1刷発行
1996（平成8）年3月30日第12刷発行
底本の親本：「正宗白鳥全集　第一一巻」新潮社
1968（昭和43）年1月
※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ケ」（区点番号5-86）を、大振りにつくっています。
入力：門田裕志
校正：仙酔ゑびす
2012年12月9日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

花より団子

正宗白鳥

２０２０年　７月１８日　初版

奥　付

発行　　青空文庫

URL　　http://www.aozora.gr.jp/
E-Mail　info@aozora.gr.jp

作成　　青空ヘルパー　　赤鬼@BFSU
URL　　http://aozora.xisang.top/
BiliBili　https://space.bilibili.com/10060483

Special Thanks
　青空文庫　威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー http://aohelp.club/
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
http://tokimi.sylphid.jp/